鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第87号

2017年5月1日

平成29年度年次総会・研究発表・シンポジウム

三輪山が育んだ大和の古代文化を論議

見学会では大神神社・石上神宮・橿原神宮参拝と希望者は三輪山登拝も

6月18日(日)に大神神社(桜井市)で開催される今年の年次総会・研究発表・シンポジウムの概要が別紙(3頁)の通り決まった。

総会に引き続いての研究発表では、渡辺弘之副理事長と岡村穣理事の発表に加えて、東西の社叢見守り隊がこれまでの活動について報告する。シンポジウムでは「三輪山と古代文化」をテーマに、基調講演では薗田稔理事長が、パネルディスカッションでは井原縁・奈良県立大学准教授、山田浩之・大神神社権禰宜、米川仁一・県立橿原考古学研究所調査課第一係長が、片岡智子理事のコーディネートで、大和創世の礎となった三輪山へ信仰と文化・歴史風土などについて議論する。

大神神社拝殿

前日(17日)の見学会では、大神神社はもとより、石上神宮、橿原神宮と大和の3大神社を正式参拝する他、天照大神と並ぶ神威を持つとされる大和大国魂大神を祀る大和神社、天照大神を伊勢に遷す前に祭祀した元伊勢と伝えられる檜原神社を訪れる。さらに山の辺の道の一部散策も予定している。

ササユリの季節、三輪山に抱かれた大和の風土、歴史を体感するまたとない２日間となるだろう。

なお、見学会につきまして、前号でお知らせした内容とは大幅に変更しております。３頁をご参照ください。さらに、正会員で総会にご欠席の方は必ず委任状をお送り下さい。

伏見稲荷大社理想の森づくり事業　夏原グラント助成金を得て継続

高枝切り作業

社叢学会では昨年来、夏原グラントからの助成金を得て、除草等の管理作業、生育状況調査等に取り組んできたが、今年度も助成の継続が決まり、伏見稲荷大社社叢でのイチイガシ林復活への取り組みを継続することとなった。

これまでの活動については、本紙や『社叢学研究』での報告の他、昨年11月には関西定例研究会で経過報告と共に現地見学会を開催してきたが、今年度も社叢インストラクターによる下草刈りや幼樹の生育状況調査などを継続する。

さらに今年度は、予てより地域で活動する父活プロジェクトから協力を求められていた、大岩神社(京都市伏見区)社叢整備についても、地元行政などと共に整備方針を協議するなどの事業に着手する予定。

第75回関西定例研究会　報告

2017年3月25日
(於:伏見稲荷大社儀式殿)

鎮守の森とコミュニティづくり
-人口減少時代とこれからの日本社会

講師：広井　良典(社叢学会理事・京都大学教授)

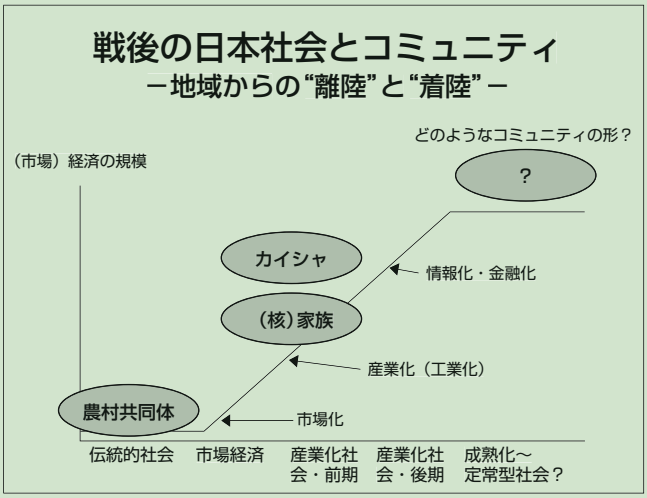
人口減少社会へ　2005年に日本の人口は減少に転じ、この「危機」を乗り越えるための活発な議論が巻き起こっている。ここでは人口減少時代の社会構想と真の「豊かさ」に向けての方策を探りたい。

日本の総人口は、2004年の1億3千万人弱を頂点に2011年には減少に転じた。2050年には1億人を切り、高齢化率も40%近くに達すると考えられている。この急速な高齢化と人口減少は危機かチャンスか、世界がジャパン・シンドロームとして注目している。

昨今、様々な「幸福」指標とランキングが発表されているが、いずれも１位はデンマークで、日本は43位～90位で高いとは言えないところにある。GNPを増大させる過程で生活の質や豊かさを犠牲にし、無理をしてきた結果だろう。経済的豊かさのわりに幸福度が見劣りするのは考えさせられる事だ。幸福度の規定要因としては、①コミュニティのあり方(人と人との関係性)、②平等度(所得等の分配)、③自然環境との関わり、④精神的、宗教的なよりどころ等、が考えられる。『地球の洞察』でJ.B.キャリコット(米の環境哲学者)は「日本人の精神に見られる自然と文化の独特の融合は、21世紀の自然保全にとっては、障碍というより強みである」と述べている。

人口減少社会への基本的視点として、人口増加期ないし高度成長期とは「逆」の流れや志向が生じるということを指摘したい。ローカルなものへの関心が高まり、鎮守の森をはじめとする伝統的価値の再発見・再評価の時代が始まっているのだ。

孤立する日本人　家族以外のつながりがどれだけあるのかを先進諸国で調査したところ、日本は社会的孤立の度合いが最も高く、個人がばらばらで孤立した状況だった。日本は、良い面もあるが面倒なことも多かった農村コミュニティ中心の社会だったが、その後、農村から都市への大移動の時代になり、やがて会社も流動化し、家族の絆も衰退してきた。このような社会でどのようなコミュニティができるのだろうか。今は古いコミュニティがつぶれ、新しいものはまだ充分に出来ていない過渡期と言える。



ここで注目したいのが高齢化に起因する「地域密着人口(=子ども・高齢者)」の増加だ。これは、さらに地域の重要性が増していることを意味している。コミュニティの希薄化や精神的空洞化が問題となる中、高度成長期においては人々の関心の中心からははずれた存在となってきた鎮守の森のもつ新たな現代的意義を再発見、再評価し、積極的な位置づけや活用が考えられていくべきではないだろうか。

鎮守の森・自然エネルギーコミュニティ構想　ポスト工業化時代となり、自然エネルギーへの関心が高まっている。「鎮守の森」を、自然エネルギー拠点に結びつけてどうだろうか。さらにそうした自然エネルギー拠点とその周辺地区を一体的にデザインし、保育や高齢者ケアなどの福祉的活動、環境学習や教育、様々な世代が関わりコミュニケーションを行う世代間交流等の場所として、新たなコミュニティの拠点として多面的に活用してはどうだろうか。

３・11を契機に、神社でも災害の際には自前のエネルギー供給源を保持し、避難所としての役割を果たす必要性が認識され、自然エネルギー導入についての関心が高まっている。既に、太陽光発電を含め、小水力発電などを既に導入している例もいくつかある。熊野本宮大社が2013年の大洪水で熊野が孤立した経験から導入への検討を始めているが、これほど大きな神社では初めての導入例となり、今後の進展が期待される。

鎮守の森セラピーと地域再生・活性化　鎮守の森での森林浴に「神林浴」という字を当てる人がいるが、人間にとって、緑や自然との関わりが心身の健康や精神的充足にとって大きな意味をもつ。『あなたの子どもには自然が足りない』で著者の R・ルーヴは自然欠乏障害というコンセプトを打ち出し、子どもを含め現代人は自然とのつながりが根本的に不足しており、それが発達の過程にマイナスの影響を及ぼすと共に、様々な現代病の背景にもなっていると警告し、アメリカなど多くの国々でベストセラーになっている。

鎮守の森を自然と触れ合う場として活用していくことは、現代的な大きな意義があるのではないかという考えのもとで始めたのが鎮守の森セラピーだ。気功を行った後、樹木に寄り添う、触れる、抱える等により瞑想を行う。事後にROS(主観的回復感)調査をしたところ、受講者11名中10名が受講前よりもトータルで好結果となっている。大きく改善されたのは「頭がすっきりしている」(＋27ポイント)、「元気を取り戻し、安らかでくつろいだ気分である」(＋18ポイント)、「集中力と周囲に対する注意力が高まっている」(＋14ポイント)だった。

鎮守の森セラピーは、自然との関わりを通じたケア・癒しの場として、身近な森としての「鎮守の森」を積極的に活用する試みで、地域の様々な世代が健康増進活動や世代間交流を行う場として、ひきこもりや孤独死防止などの面においても意義が大きいと思われる。これを普及していくためには、神社・寺院関係者、森林関係者、森林インストラクター、社叢インストラクター、医療・福祉関係者、自治会や地域の団体等の関係者をつなぐことが重要だ。

環境省の「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト中間とりまとめ(2015)でも、森里川海とつながるライフスタイルへの転換プログラムを提示し、活動例として「鎮守の森」を活かした祭りや世代間交流等の活動促進、森林療法など自然とのかかわりを通じた心身の健康や癒しに関する活動促進を上げている。

現代社会では、 個人はその土台にある「コミュニティ」や「自然」、ひいては「スピリチュアリティ」（精神的なよりどころ）とのつながりを失いがちで、高齢者の孤独・孤立が大きな問題となっている。日本経済新聞社と産業地域研究所が、退職後に自宅以外で定期的に行く居場所があるかについて、首都圏に住む60～74歳の男女へアンケート調査をしたところ、女性は親戚の家、友人の家という答えが上がってくるのに対し、男性は公園となっており、１人でぽつんと佇む姿が目に浮かぶようだ。

戦後の日本人にとって、農村から都市への人口大移動が起こった結果、「カイシャ」と「(核)家族」が“居場所”の中心になり、特に男性にとっては最大の居場所がカイシャで、団塊世代の退職や急速な高齢化の進展の中で、新たな「居場所」を模索しているのが現在の日本社会だと言える。こうした中で、「居場所」を意識したまちづくり、都市・地域政策の重要性が指摘される。

若者の地域回帰　若い世代の「ローカル志向」が高まっている。大学進学にあたり49％が「地元に残りたい」と考えて志望校を選んでいるが、これは4年前に比べて10ポイントの増加となっている（リクルート進学総研調査　2013）。また内閣府調査（2007）では、18～24歳の若者で、今住む地域に永住したいと答えた人は43.5％と、98年調査から10ポイント近く増加している。さらに日経新聞によると、首都圏の私立大学に入学する地方出身者の割合は低下しつつあり、地方（東京都と大阪府以外）への移住者も着実な増加傾向にある。海外に留学していた学生が地元や地域にＵターン、Ｉターンする例も多い。これをして“内向き”批判は的外れで、むしろそうした方向を支援する施策が必要だと思われる。

ここで注目されるのは「祭りが盛んな地域ほど若者が定着したりＵターンする傾向が高い」という指摘だ。企業誘致による地方への定住促進よりも文化的アプローチが重要だということを意味しているのではないか。今後の研究課題としては、若者のＵターンやローカル志向と「祭り」との関係性についての客観的分析と、地域再生・活性化に関する、従来型の経済的・産業論的アプローチと、文化的・歴史的・風土的アプローチの接合があげられる。

鎮守の森とターミナルケア　高齢化時代=死亡急増時代で、作家の五木寛之は「『死』はいま『生』よりも存在感を強めている」「いま『生き方』と同じように、『逝き方』を現実の問題としてオープンに語り合えるようになってきた気配がある」と述べている。高度成長期に日本が脇に置いてきた課題が死生観の空洞化で、団塊世代が今まさに直面しつつある課題だろう。

「スピリチュアリティ」は、キリスト教や仏教などの高次宗教においては、「永遠の生命」「空」などという理念化・抽象化された概念として考えられる傾向があるが、最も基底的な自然観においては「自然」と一体のものとして考えられてきた。人口減少時代はこうした自然観・死生観を再発見、再構築していく時代ではないだろうか。かつての日本は共同体の中心に神社や寺院が存在し、スピリチュアリティや自然が一体となったコミュニティを形成してきた。そうしたコミュニティや自然とのつながりを喪失してきた現代社会においては、いかにコミュニティと自然、スピリチュアリティとのつながりを回復していくかが課題だろう。

鎮守の森がターミナルケアに関わり、精神的な意味での「たましいの帰っていく場所」として存在することが重要だという観点から提案するのが「鎮守の森ホスピス」だ。これには石清水八幡宮の神職が関心を示しており、実現すれば画期的なことになるのではないだろうか。

日本人の死生観　－その３つの層－

	特質	死についての理解／	生と死の関係
A.“原・神道的”な層	**「自然のスピリチュアリティ」**	「常世」、「根の国」…具象性	生と死の連続性・一体性
B.仏教（・キリスト教）的な層	現世否定と解脱・救済への志向	浄土、極楽、涅槃等（仏教の場合）、永遠の生命（キリスト教の場合）…抽象化・理念化	生と死の二極化
C.“唯物論的”な層	“科学的”ないし“近代的”な理解死	死=「無」という理解	死=有 死=無

地球倫理と鎮守の森　今後、アジアが急速に高齢化し、国連長期人口推計では世界人口の増加は徐々に緩やかになり2100年には約110億人で安定するとし、「20世紀が人口増加の世紀(…)だったとすれば、21世紀は世界人口の増加の終焉と人口高齢化の世紀となるだろう」（ルッツ）。

21世紀後半に向けて、世界は人口や資源消費が均衡化するある定常点に向かいつつあるし、そうならなければ持続可能ではない。日本は環境親和型社会の実現に向けてのフロントランナーといえる。自然との親和性や、伝統的な自然信仰を保存し、相対的に費用対効果の高い形で長寿を実現している日本は近代西欧文明とアジア、先進国と途上国をつなぐ位置にあると言える。「鎮守の森」に象徴されるコミュニティと一体となった日本の伝統的な自然観の再評価が必要で、そうした伝統文化と現代的課題をつなぐことが重要であろう。

日本学術振興会

若手研究者海外挑戦プログラム募集

申請期間は5/15～19

日本学術振興会では「若手研究者海外挑戦プログラム」を平成29年度より新たに開始する。

これは、海外で3ヶ月～1年程度、現地の研究者と共に研究に従事する機会を提供し、将来、国際的な活躍が期待できる豊かな経験を持つ優秀な博士後期課程学生等の育成に寄与するためのもの。

詳細は同会HPの「独立行政法人日本学術振興会若手研究者海外挑戦プログラム平成29年度募集要項」を参照されたい。

全国の巨樹・巨木林の情報を公開中!!

林進副理事長のコラムも

環境省生物多様性センターでは、全国の巨樹・巨木林の現況を把握するため、全国の巨樹・巨木林の情報を提供、収集するシステム「巨樹・巨木林データベース」を公開している。これを利用すれば、気軽にパソコンやタブレットから調査データを検索・閲覧したり、巨樹の情報や写真を登録したりすることができる。提供された巨樹の情報は、データベース化され、誰でも見ることができる(URL：http://kyoju.biodic.go.jp/)。

＜巨樹・巨木林データベースで出来ること＞

① 検索・閲覧：全国の巨樹(約２万本)を様々な条件や所在地等から検索し、詳しい情報を閲覧できるほか、巨樹の位置を地図上で確認できる

② 報告：巨樹の情報や写真を投稿できまる。調査対象は幹周囲が３m以上の樹木で、報告にはユーザアカウントの登録が必要

③ 巨樹コラム：林進当学会副理事長が巨樹の魅力を伝えるコラムを掲載中(月1回更新)

●問い合せ先：全国巨樹巨木林の会 事務局
〒130-8606 墨田区江東橋3丁目3番7号（一財)自然環境研究センター内「全国巨樹・巨木林の会」運営事務局 TEL03-6659-6153 e-mail:kyojyu-web@jwrc.or.jp

事務局から

● 平成29年度(2017年4月～2018年3月)の会費の振替用紙を同封いたしました。払い込みには銀行振り込みもご利用いただけます。三菱東京UFJ銀行 京都支店 普通口座6720345 特定非営利活動法人社叢学会 理事長 薗田稔 です。また、銀行等から郵便局振替口座にお振り込み頂く場合は、099店 当座 0172640 特定非営利活動法人社叢学会 にお願いいたします。

● 今年の総会は、大和創世の歴史を秘めた三輪山に抱かれた大神神社での開催です。見学会では大神神社に加えて石上神宮、橿原神宮という大和の３大社を参拝するほか、三輪山登拝、山の辺の道散策など、今回も盛りだくさんの内容です。国のまほろばを実感する絶好の機会です。ぜひご参加ください。

なお、見学会等の参加費は、会費振替用紙の金額欄を修正してご利用ください。

編集後記

窓の外が何やら賑やか。ぼーっと眺めていると作業着のおにーさんと目が合った！ おっと！ そういえば外壁塗装工事するって大家さんがタオル持って挨拶にきてくれたなぁ。とゆーまに足場が組まれ、シートがはられ。ちょっと暗いなぁ。でも、午後（すでに夕陽燦燦。パソコン画面が見えないよぉ）は日陰になってちょっとええかも。

がっ！ 困るんだよね。だって、お昼寝（おいおい）できないじゃん。大口あけてよだれ垂らしてる時におにーさんに遭遇したら恥ずかしいもん(ってトシでもないんだケドネ)。

閑話休題(あ、本題の余白が…)、前号です。発送の前日に理事会が。「見学会だけど、やっぱり石上神宮には行きたいよなぁ」とか「ここまで行くんなら山の辺の道は歩きゃなきゃなぁ」とか。もちょっと早く言ってよ！ １面の記事がえらい嘘つきになってしもたやん。 (藤岡 郁)

次回予告【第75回関西定例研究会】

◆日 時：2017年7月29日(土) 13：30～15：30
◆場 所：伏見稲荷大社儀式殿（伏見区藪ノ内町68）
◆テーマ：「フロ」 今に残る杜の残像
※「フロ」は出雲に散見される信仰対象地(物)で、森であることもある
◆講 師：西尾良一（社叢学会会員）

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL075-212-2973 FAX075-212-2916
URL http://www.shasou.org E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1－1 秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032 E-Mail shasougakkai@hotmail.com